

グラスボート

不思議な空間がガラス越しに見える
心地よい薄暗さで気持ちよさそうに泳ぐ

住めるはずもないとこなのに
引き込まれるなぜなんだろう
アクアリウムなどとは違う本物の世界だ

遠浅のサンゴ礁 覗く水の底に
いくつもの命がかたまり生きている
カクレクマノミ イソギンチャクの上
気にも留めないスズメダイの群れ

みんな同じほうにリズムカルに動く
水に生きることも群れることは同じ

住んだこともないはずなのに
懐かしいのはなぜなんだろう
テーブルサンゴの下から
生まれたような気もする

遠浅のサンゴ礁 こんなところにも
いくつもの命が寄り添い生きている
カクレクマノミ イソギンチャクの中
長い付き合い そう 相利共生

不思議な空間がガラス越しに見える
心地よい薄暗さで気持ちよさげに泳ぐ

水に流して

誰にも迷惑かけずに
ここまできたはずなのに
かえってほとんど
かまわれなかったことがさみしい

素直に甘えていたなら
もっと楽なはずだった
小利口 才走り 拳句の果てには生意気

そんなつもりでは なかったことを
切り返されて はじめて気がつく

できることなら 水に流して
これまでの全て やり直したい

本当はもっと気楽に
やればよかったかもしれない
大切なものは
何だったのかわからなかった

流れを今止めるのは 難しいことに気がつく
独断 偏見 拳句の果てにはひとりぼっち

こんなはずでは なかったことを
言い渡されて はじめて気がつく

できることなら 水に流して
これまでの全て やり直したい

スーパームーン

家の近く買い物して
屋上の駐車場で
東の空 ふっと見たら
驚くほどスーパームーンが光る

そうさ あそこここは
果てしなく遠いのに
何も遮るものないところで
つながってる見える

不思議だね近くても
避けたいとこ見えないのに
もうどこにも いかない
気持ちに ふたんかかるんだ

目の前のカップルが
月を見て思い出するように
それぞれのモバイル出し
いくつかの画像を撮りあってる

そうさ あそこここは
果てしなく遠いのに
小さな画像の中では
何気ないカタチでとけこむ

不思議だね近くても
避けたいとこ見たくないのに
遠くても行けなくても
残すほど見ていたいものなのか

遠い水の記憶

遠い記憶 その頃には
誰もいかない 彷徨うようにひたすら

晴れた海からやっと着いた
夕暮れ直近のシキ割の水に

冷たく心地よい刺激が喉を伝わり
生きてる喜びを感じさせてくれる

斜面に張った布のテント
引き寄せるキスリングが濡れてた

明日のことはなんとかなるさ
次の水場をひたすら求めて

真っ黒の夜空はとても怖かったけど
仲間もいた若かった
あの頃には戻れない

忘れていた素朴な遠い水の記憶に
大切なあの頃を思い出させてくれる

夏のーコマ

じゅんさいの水沼に
いくつかの箱舟

水面に緑が浮かび
その下覗く人たち

畦道を走る子供
手には白いあみ持って

足元の空の箱舟
オールにしおからとんぼ

時間がひとたび昔に遡り
お蕎麦の味の余韻を楽しむ

さくらんぼの畑の中で
カゴを手にとって

赤い実を空にかざし
そのまま頬張る

向こうの木には家族が
同じほうを見上げて

差し伸ばす腕の下に
一人がカゴを抱える

時間がひとたび昔に遡り
すっぱい味の余韻を楽しむ

簡素に颯爽と 優美にイキイキと

水に生きるものたちも
傍目だけでわからない
仲間たちとのやりとりが
あるに違いないはずだ

人の社会もこの頃は
たとえ孤独な生業も
繋がり合うのが大事と
見直されているワークスタイル

群れることよりも
誰はばかりことなく
付き合いをなくして
気楽になろうとしても

一人だけでできることに限界感じて
悔やんでしまっても後戻りできない

こういうのがいい 不満なことに
合わせるだけでなく 問い続けてゆきたい

僕はこれからも けして媚びない
良いと思うものだけ 追い求めてゆきたい

水に生きるものたちも
傍目だけでわからない
異性とのつながりが
あるに違いないはずだ

人の社会もこの頃は
女だとか男だとか
問わないことが大事と
見直されているライフスタイル

気遣うことより お互いの言い分で
差別ないところで 同じように振る舞う

庇おうとすることに 反感さえ持たれて
後退りしても なおさら気まずくなる

こういうのが好き 性別はどうあれ
支える人と 支えられる人

支える人は 簡素に颯爽と
支えられる人は 優美にイキイキと

こういうのがいい 妥協だけでなく
ときには向き合い確かめていきたい

僕はこれからも けして媚びない
水に生きるものたちと同じように